

第4章 下野市の歴史文化の特性

1. 歴史文化の特性

(1) 重要遺産(史跡)が集積する古代文化

下野市の歴史の中で最も豊かな文化財を残しているのは、古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代までの古代である。冬でも比較的暖かく降雪量も少ない、夏も比較的涼しい穏やかな気候、台風などの自然災害も少ない住みやすい土地で、縄文時代草創期から人々が定住をし始めた。そして、弥生時代の集落跡を覆うように、北関東では早い時期に古墳が築造され始めた。

古墳時代前期の小地域の首長墓と考えられる前方後方墳が三王山から宇都宮市茂原町に分布している。また、古墳時代後期から終末期には下毛野国を統治した首長の墓とされる前方後円墳や円墳が思川や姿川流域に多数残されている。特に6世紀後半以降には複数の系統の首長が並立したが、武力衝突することなく、輪番制のような体制を整備し共存を図ったことが読み取れる地域である。

これら首長墓は、墳丘1段目に広い基壇面を持ち、前方部に石室を配置し、凝灰岩切石を用いて横穴式石室を内部主体とするという独特な特徴を共有することから、これらの古墳は近年の研究では「下野型古墳」と呼称され、研究の対象とされている。

7世紀中頃に古墳の築造が終焉を迎えると、落内遺跡に^{しもつげのし}下毛野氏の居館と考えられている建物群が配置され、その後、隣接地に下毛野氏の氏寺として下野薬師寺が建立された。建物の造営にあたっては、礎石や基壇外装に凝灰岩切石が使用された。

律令体制が導入されると、東国にも郡の役所である郡衙が配置され、東山道の沿線に下野国庁をはじめとする律令期の公的施設が配置され、聖武天皇の命により下野国分寺・下野国分尼寺が建立された。また、官寺となった下野薬師寺には、天平宝字5(761)年に僧侶となるための受戒を受ける「戒壇」が設置され、東国における仏教施策の一翼を担う重要な寺院として位置づけられた。

下野市周辺は弥生時代後半から古墳時代以降、奈良・平安時代にかけて首長層による巨大墳墓の築造や国家プロジェクトによる官衙・寺院の建設が次々と実施された地域であり、それらを支えた多くの庶民が当地には暮らしていた。発掘調査により、多数の集落跡が発見され、他地域と交流があったことを示す遺物等も多数出土している。このような遺跡の状況は、下野市一帯が東国における飛鳥時代の変遷を表す遺跡が集中する歴史文化の特性をもつことから「東の飛鳥」と称することもできる地域である。

(2) 有力豪族の勢力圏の狭間で展開した中世社会

自治医大地区開発の際に発見された下古館遺跡の中央部からは、南北に伸びる道跡が発見された。この道跡は地元で「うしみち」と呼ばれていた道路の下から発掘され、その線形もうしみちとほぼ同じであった。これにより、小山と宇都宮を結ぶうしみちが中世から存在したことが推定された。古代道に続き中世でも下野市域は交通拠点としての性

格を保持したが、同時にこの地理的特性が小山を拠点とする小山氏と、宇都宮を拠点とする宇都宮氏という有力豪族（武士団）の勢力圏の狭間で、支配をめぐる目まぐるしく変化する下野市域の中世の歴史を創り出すこととなった。

鎌倉幕府成立の際、下野市域は北関東で重要な地位にあった小山氏の勢力範囲となっており、その支族である薬師寺氏が奥大道の警護として薬師寺城を築城する。鎌倉中期以降は新たに勃興した宇都宮氏族系の支配、壬生氏の台頭、結城氏、下妻・下館系の支族の支配等、状況は目まぐるしく変化した。こうした中で、児山城（県指定史跡）や箕輪城が築城された。城館以外にも先に挙げた下古館遺跡では、多くの人々が集まり交流した市場または宗教空間とみられる場所も形成されており、有力豪族の勢力圏の狭間で暮らした人々や、武士団が土地を守り、交流や経済を発展させながら、生き延びてきたことがうかがえる。

有力豪族の勢力圏と在地のあり方、中世の市場や宗教空間のあり方、交通路とこれらの関係等、下野市域の中世文化は全国的に重要な歴史的課題を豊富に内包している。

（3）近世・近代の経済発展を支えた干瓢と結城紬

下野市の歴史文化を語る上で欠かすことのできない特産品として、干瓢が挙げられる。干瓢は夕顔の実を細長くむいて乾燥させたもので、正徳2年（1712）に近江水口藩の藩主であった鳥居忠英が下野壬生藩に国替えになった際に、夕顔の種を取り寄せ栽培を奨励したと伝えられる。また、下野市の気候が干瓢の元である夕顔の育成に適していることもその要因の一つと考えられている。これらの歴史的な背景により下野市をはじめとする栃木県南部に干瓢の生産が広まり、現在、栃木県は全国の干瓢生産の97%を占め、このうちの52.9%が下野市で生産されている。干瓢生産に使用された道具である手かんや丸むき機は、下野市の貴重な有形民俗文化財である。

また、夕顔の花が咲く畑や家の広い庭いっばいに細長く剥いた夕顔の実が干されている風景、そして出来上がった干瓢の見栄えを良くするための漂白をする時の独特な香り、夕顔の作付けに必要な畑の肥料である落ち葉を供給する畑の周囲に点在するクリ・クヌギ等の雑木林、干瓢を保管するための石蔵を備えた民家によって構成された景観がこの地域の夏の風物詩であり、本市の代表的な文化的景観である。

干瓢と並びこの地域の工芸品として名高いものに結城紬がある。結城紬は茨城県、栃木県で主に生産される絹織物で、栃木県では小山市から下野市付近まで、茨城県では結城市周辺が主な生産地となっている。この地域は小山氏とその傍系である結城氏の支配範囲であるとされている。結城紬は江戸時代より最上級の紬としてその名が広く知られるようになり、明治6年（1873）にはウィーンの万国博覧会に出展された。昭和31年（1956）には国の重要文化財に指定されている。さらに平成22年（2010）にユネスコ無形文化遺産として登録されており、市内では下野国分寺跡に近接する甲塚古墳から機を織っている状態を表現した機織形埴輪が発見され、古代より織物が盛んな地域であり、それが中世結城氏の支配を経て江戸時代に結城紬となり、技術の改良と洗練により現在

まで続いていることがうかがえる。

干瓢と結城紬は明治以後に生産がますます盛んになり、近代以降の下野市域の経済を支えた。また、近世以降、講をはじめとした様々な交流行事や民間信仰、風習が培われる上で、大きな影響を与えたと考えられている。

(4) 交流と祈りのかたち「講」と「祭り」

古代律令期には国家宗教を背景に下野薬師寺や下野国分寺が建立されたが、中世以降は子孫繁栄、極楽往生等の庶民の幸福を願う民間信仰が広がり、近世以降に盛んになっていった。

こうした民間信仰を背景に近世以降、各種の「講」や共同体のハレの行事である「祭り」が下野市域の各地区で盛大に行われるようになった。講や祭りには、集まった人々が共に御馳走を食べる会食がつきものである。講の構成員はそうした会食に掛かる費用負担を賄えることが求められる。下野市域で講が盛んであった背景には、干瓢と結城紬の生産により、農家に一定以上の現金収入が見込めたことや、交通要衝地としての宿場や沿道集落の安定的な営みがあったためと考えられている。

祭礼の拠点となった神社も、各村単位で祀られており、薬師寺八幡宮は貞観17年(875)に石清水八幡宮の祭神を勧請、上吉田天満宮は弘安元年(1278)結城氏が北野天満宮から勧請したとされている。本吉田八幡宮は文治4年(1188)、小山朝政が鎌倉鶴ヶ岡八幡宮を勧請、磯部神社は延長年間(923~930)に結城氏が勧請とされ、南河内地区だけでも79の神社が祀られている。国分寺町史民俗編に採録されている神社は八社であるが、箕輪の鷲宮神社は旧石橋町橋本地区と二村の鎮守氏神として祀られてきたもので、寛治5年(1091)に源義家が奥州追討の際に参拝したとされる。

小金井の金井神社は、境内に八坂神社、天満宮、雷電神社を祀っている。当初、この神社は虚空蔵と呼ばれていたが、次に北辰社、その後星宮神社から金井神社と名称が変わっている。現在の下古山地区にある星宮神社は、乾元元年(1302)に児山城の鎮守として勧進されたと記録にある。この星宮神社は、全国の中でも下野市周辺に多く祀られている。合祀や現在所在不明の場合も含め、星宮神社または星宮信仰に関連する神社は、旧国分寺地区だけでも八社、石橋地区には九社、南河内地区には六社あるとみられる。当地域を中心にこの分布は限定的な地域を示しており、非常に特徴的な分布である。

こうした民間信仰やこれに基づく交流によって生み出された民俗文化財は、現在では廃れてしまったものも数多いが、市内に残る十九夜塔などの石造物は講が行われていたことを伝えており、現在も地元の人々によって受け継がれている八坂神社の祭礼やお囃子、太々神楽等の民俗芸能によって、人々が守り伝えた文化のかたちが継承されている。

(5) 古代から続く人と道のつながり(下野市の歴史文化を貫く要素 交通とネットワーク)

古代には東山道が、江戸時代以降は日光街道や関宿通多功道が通り、中世には鬼怒川右岸の舟運で栄えたと伝えられる等、下野市の歴史の中で「交通」は常に大きな役割を果

たしていた。古代の幹線道路である東山道沿いには下野薬師寺跡、下野国分寺跡、下野国分尼寺跡をはじめ、下野国庁跡（栃木市）や多功郡衙跡（上三川町）や上神主・茂原官衙遺跡（宇都宮市）等、古代下野の行政や仏教文化を担った重要遺跡が連なっている。また、同時代の宇都宮市以南から下野市域にかけての遺跡からは、多数の新羅系土器や畿内産土師器等が出土しており、これらの官衙や寺院の建設のために、東山道を通って最新の技術を保持した渡来系氏族や畿内の技術者がこの地に来訪したことがうかがえる。江戸時代には日光街道の宿場町（小金井宿・石橋宿）を軸として繁栄し、徳川将軍の日光社参の際の休息所が設けられた。

明治時代になると、上野から宇都宮間の鉄道（東北本線）が開通し、石橋駅・小金井駅が開業した。これを契機に江戸時代の宿場町は、首都東京と鉄道路線で結ばれた物流の要衝として発展していった。また、自動車の普及に伴い日光街道は、国道4号として整備され、物流の動脈として新たな発展を遂げていった。

以上のように、「交通」は、古代から現在に至るまで下野市の歴史文化を貫く要素となっている。

下野市の歴史文化は近隣自治体を含む地域一帯の広がりの中で、その本質的な特色を捉えることができる。栃木県南域における古墳時代の首長墓の消長・変遷は、田川流域、姿川流域で展開された。現在の行政区域では下野市、小山市、壬生町、栃木市、上三川町、宇都宮市南部にまたがる地域である。

飛鳥・奈良・平安時代には東山道の推定ルート上に、国府、官衙、寺院が設置・建立された。下野市域の下野国分寺・国分尼寺は栃木市の下野国府と一体となって、古代下野国の中心を構成していた。また、下野薬師寺跡の近隣には、豪族の居宅等の特殊な集落と考えられる多功南原遺跡（上三川町）があり、東山道沿いに北へ向かうと、官衙である多功郡衙跡（上三川町）や上神主・茂原官衙遺跡（宇都宮市・上三川町）が存在する。これら官衙、寺院は相互に密接に関連していたことが考えられる。

また、宇都宮市の水道山瓦窯跡では、下野薬師寺、下野国分寺、下野国分尼寺、上神主・茂原官衙に供給された瓦を、小山市の乙女不動原瓦窯跡では下野薬師寺に供給された瓦を焼成したことが、調査により確認されている。さらに、隣接する常陸国（茨城県）の新治廃寺跡、結城廃寺跡（結城市）からは、下野薬師寺系に属する瓦が数多く出土しており、寺院や官衙の造営に関するネットワークが国を超えて存在していたことをうかがわせる。

中世にはこのネットワーク文化圏は小山氏、宇都宮氏の支配域となり、下野市域は2大支配域の境界として児山城、薬師寺城、箕輪城等の城館が設置された。

この範囲が結城紬の生産地と重なることも興味深い。結城紬は中世に小山氏とその傍系である結城氏が支配した地域で発展したものであるが、中世の小山氏、宇都宮氏等の支配域が、古代以来の文化圏につながるものであることをうかがわせる。

近世以降も交通拠点として発達した下野市の歴史文化は日光街道や東北本線等の交通路で結ばれた地域とのネットワークに密接に関連している。その基盤となるのは、古代以来の文化圏であり、その中に下野市の文化財も位置づけられている。